

平成29年度第1回総合教育会議 概要

日時 平成30年2月20日(火)

16:00~17:10

場所 本庁舎会議室401

1 参加者

夏野市長

長井教育長、眞岸委員、宮原委員、織田委員、野上委員
(事務局)

企画管理部 明神部長、松長次長

政策推進課 久々江課長、笠間係長、旅家主事

教育委員会事務局 稲垣事務局長、杉本次長

学校教育課 原課長、菅原課長補佐

生涯学習・スポーツ課 園木課長、北村課長補佐

教育センター 荒治所長

2 射水市英語教育推進事業について

教育委員 昨年まで英語活動の授業を何回も拝見しているが、子どもたちが本当に楽しそうに英語に触れ合っている。その中で、英語を話せるようになりたいと意欲を示す子どもも多い。子どもたちが早くから英語を楽しく学べるよう環境を整えることは、大変良いことだと思っている。子どもたちの関心や意欲を大切に育み、中学校、高校等での実践的な教育につなげることが大事。それが「学びが楽しいまち」につながると思う。また、文部科学省の調査にもあるように、現場の教員の多くは英語指導に関して不安を抱えている。色々とご支援いただいているところではあるが、まだまだ不十分というのが現状である。教員自身が「楽しい」と思えるように、負担感なく自信を持って子どもたちの前に立って授業を行えるように支援態勢、研修態勢を十分に整えることが必要ではないかと思うので、今後とも支援をお願いしたい。

教育委員 これからの時代、グローバルな人材を育てるためにも、色んな言語に触れ合うことが必要だと思う。英語嫌いの子が増えないようにしたい。「わからない」が増えると興味・関心より恐怖を感じることもある。そのため、ALTや教員の方々と連携して取り組んでいきたい。学校教育だけでなく、日常の色んな場面で英語と触れ合う機会があればいい。子育て支援センターで外国のお子さんと遊ぶなど、遊びの中で英語に触れる時間があるといい。そして楽しさがベースとなり、小学校中学校での英語の学習につながると思う。

教育委員 「楽しい」には表面的なものと本質的なものがある。「わかる」「理解する」「話せるようになる」が本質的な楽しさ、面白さになる。若い教員に話を聞くと、苦手意識がある人もいる。しかし英語が好きな人に聞くと、中学校からでも「わかる」と楽しくなり、好きになったそうである。小学校1年生からこの事業が始まるとのことだったが、もっと

早くから実施してもいいと思う。耳で正しい英語を聞きながら楽しく体を動かして活動することから始めて、後から実際に内容をしっかり学ぶ。開始を1年生からに早めるのであれば、幼稚園や保育園でも、より早めてもいいと思った。耳から覚えるのが大事。

教育委員 子どもが小さければ小さいほど、そのまま素直に英語を聞くことができる。小学校高学年になってから学んでもどうしても日本語に無い発音が難しいし、発音に照れが出る。1年生くらいなら先生の言うとおりに素直に発音する。また、中学生くらいになると、好き、嫌い、得意、苦手が出て、受験のために必要となり嫌いになりがちだが、小さいころから英語に触れ合い「英語は楽しい」と思って育つと、もっと取り組みたくなるのではないか。スマートフォンでも利用できる翻訳機の性能はどんどん上がっているが、自分でコミュニケーションをとれるともっと楽しいということ子どもたちに伝えたい。

教育長 基本は「習うより慣れる」の考えで低学年からの実施を検討している。英語という言語自体というより、異文化の体感や、違った言語で自分の思いを伝えることでコミュニケーションの素地を養うことが大事だと思う。だからただ覚えるだけでなく、違った言語で楽しい時間を共有することで成長を促す環境を作りたい。様々な国、様々な人と触れ合う機会も多くなる。ALT、教員だけでなく留学生、保護者等を有効に子どもたちの生活の中で活用すること、触れ合う機会を増やすことが重要だと思っている。教育委員会としては、教員の指導力向上がベースにあるが、射水市がもっている財産を子どもたちのために活かすことも大事かと思っている。

市長 英語については、国からも方針が出されている。早いうちから英語に触れ合い、楽しむことで、色んな方とコミュニケーションが取れるようになり、自分の可能性を広げることに繋がる。英語嫌いにならないように環境づくりを進めたい。ALTの小学校への配置も考えながら取組を進める。先進事例を共有できるような研修の機会を取り入れながら、子どもたちにとっていい環境になるようにしていきたい。他の事例も勉強しながら、ALTや教員の方、地域の英語を教えている方等のご協力を得ながら、子どもたちが英語に触れる機会を増やすことも大事だと感じた。

3 射水っ子体力づくり支援事業について

教育委員 教員等の指導力向上が組み込まれているのがとてもいいと思う。いい指導者につくことで運動能力がより向上する子や、特性を見極めて指導することで伸びる子も多いので、指導力強化は重要である。また、環境整備も大事。たとえば、大島運動公園のふわふわドームは何十人という子どもが利用している。自分のリズムだけでなく周り調整して跳んでいるし、自然にできるようになったであろう前宙をしている子もいるのを見て、遊びながら学べるすばらしい遊具だと思った。市内各地に作るのは難しいだろうが、工夫しながら小学校や幼稚園等にそれに近いものがないだろうか。室内に設置した鉄棒やジャンピングボードのように、遊具を常設することによって子どもが一年中いつでも使えるように環境を整えていければいい。何を置けばどんな力が付くのか等研究を進めて射水

市の特徴にするのもひとつの方法かと思う。

教育長 購入すると数万円するようなジャンピングボードを手作りにより数千円で用意したところもあると聞いたことがある。遊具の作り方等情報交換して手前で作って数を作ればいいのかもしれない。

教育委員 一度作れば何年も使えて、色んな子どもたちが遊びながら体力をつけられる。渡り廊下等、意外と屋根のついたところにスペースがあるので、そういうところに常設するのも手だと思う。

教育委員 「携帯電話とかゲームで遊んでいる子どもは、健康や意欲の満足度が低い」と文部科学省で示されているが、そうではなく、「親子のコミュニケーション等の満足度が低いからゲームをする」と仮説を立てる論文を読んだ。親子で家でもなわとびの練習ができると、子どもの体力づくりだけでなく親子の触れ合いにもなる。市内スポーツクラブで親子一緒のメニューがあるのは、忙しい保護者に対する体力増進の一助かと思う。子どもたちが学校にいない間も色んな人と協力できる体制が必要かもしれない。また、新たにものを作るのはお金がかかるので、たとえば市報の片隅に「この公園には体力づくり用の器具があります」「休日、親子で公園に行って体力づくりしませんか」と載せる等、今あるものを最大限活かしたい。

教育委員 基本的な生活習慣を整えて、しっかりした体を作るのが大事だと思う。就寝が遅い、テレビを見る時間が長い、朝食を摂らないといったことが体力低下につながる。今一度、家庭と連携して、生活習慣を整えることが求められている。また、階段等身近なものを利用して体力づくりに取り組むのも効果的だと思う。「古くなった」「危険」等の理由で公園から無くなった遊具もあるが、身近にぶらさがったり登ったりできる遊具があれば、子どもたちは遊べる。遊ぶことで健康づくりができるし、一方では危機管理能力も培われると思う。

教育委員 体力テストの結果を見たとき、ちょうど今の子どもの親世代が子どもだった頃にゲームが世の中に出てきた頃かなと思った。子どもも体力づくりが必要だが、親はどうだということがある。定期健康診断のように、大人への節目体力テストがあればいいと思う。

教育委員 お金のかからない体力づくりということで、鬼ごっこを提案したい。状況を見て、判断して、走る、曲がる、止まる等様々な要素が含まれている。走るのが苦手な子もいれば、捕まるのが嫌という子もいて、いじめにつながらないよう工夫をしなければならぬが、鬼ごっこは持久力もつくし瞬発力もつくので、体力づくりの要素を多分に含んでいる。なわとび大会のようにグループで鬼ごっこ大会が開ければ道具も何もいらず、体一つで取り組めるので、検討していただければと思う。

教育長 運動して体を使うことで食べる、眠る、人と関わる、といった生活習慣づくりにもつながる。単に体力テストの結果ということではなく、体力づくりを通して高まる生活の面もあるということ意識して欲しい。それぞれのニーズにあった情報をいかに提供す

るかが大事かなと考えている。色んな大学やそこで専門的に学んでいた人等の資源を十分活かして高めていけたらと思っている。

市長 子どもたちは触ったことがないものについて、本当に知らない。英語にしる運動にしる、幼児期から触れさせることが大事かと思う。